日本霊異記の役割

守屋俊彦

私は、ここ十年来、霊異記をずっと読みつづけてきている。しかし、霊異記を読みはじめたのは、これといった学問的な目的があったからではなく、あまり読んでいない作品なので、一度読んでみよう、というぐらいの軽い気持からであった。だが、読んでゆくうちに、霊異記が学問的に重要な作品である、ということに気が付いてきた。結論的にいえば、文学史的にみた場合、古代と中世とを結ぶ架橋の役割を果しているということである。

一体、霊異記は、国文学の作品の中で、一応名の通っているものとしては、最も研究の遅れているものの一つであろう。そこにはいろいろな理由があるのだが、一つの理由は、霊異記が位置している場所にある。古代と中世との境目に位置しているということなのである。つまり、古代をやっている人にとっても、中世をやっている人にとっても、遠いところにあるということである。関心と興味が向かないのである。日本文学史の本を開いてみても、霊異記は古代に入っていたり、中世に入っていたりして、一定していない。私が霊異記を研究していて困ることは、研究文献目録である。古代と中世との両方の頁をみなければならないからである。それどころか、古代と中世とのどちらの頁にもないことがある。古代をやっている人は古代の作品と思わないし、中世をやっている人は中世の作品と思わないところから、このような現象が生じてくるのである。不幸な作品であるといえる。要は、古代と中世との境目に位置しているということが、こうした現象をもたらしているのである。

しかし、この古代と中世との境目にあるということが、実は、霊異記を重要な作品として押しだすことになるのである。古代でもなく中世でもないということは、逆にいえば、古代でもあり中世でもある、つまり、古代と中世の両方を持っていることにもなるのである。そこから、霊異記が古代と中世とを結ぶ架橋の役割を担うことになるのである。

霊異記は、一般的には説話文学とされている。説話文学は、いうまでもなく、口承的な性格を持っている。その口承的なものを古代に求めてみれば、神話ということになろう。それならば、文学史的にみた場合、神話と説話がどのような関係になるのか、ということは当然問題になるであろう。関係がないかもわからないし、あるかもわからない。もしあるとすれば、どのような関係になるのであろうか。従来の日本文学史では、神話は神話として取り上げられ、説話は説話として取り上げられ、両者の関係については、触れるところがなかった。しかし、文学史である以上は当然触れるべきものであろう。この課題に資料を提供してくれるのが、霊異記なのである。

霊異記を読んでゆくと、しばしば神話的なものにでくわすのである。神話的といったのは、神話そのものではないということである。そこには、うっすらとではあるが、説話的なものがみられるのである。例えば中八である。蛇に犯されそうになった女が、放して

やった蟹によって助けられるという話である。ここでは、蛇は、頭をあげて女の顔をみたり、女のいる部屋の壁を尾でたたいたり、まるで好色な男のように振舞っている。そして、危機一髪というところで、うまく蟹が登場して助けるという筋になっている。説話的である。しかし、この話は本来このようなものではなく、農業神としての蛇と、それに仕える巫女との聖婚の儀礼を語る神話だったのである。その聖なる結婚が興味本位に語られているのである。表面は説話なのだが、そのすぐ裏に神話があるということなのである。いってみれば、一つ話の中に神話と説話とが重層しているのである。霊異記にみえる神話的なものは、殆どこのような形態になっている。

さて、このように、一つ話の中に、神話と説話とが重層しているとすれば、神話と説話とは何らかの関係があったとみなければなるまい。そこには二つの線がある。神話から説話へと、説話から神話へ、とである。そして、私は、柳田国男氏の方法に従って、前者の立場を取ってみた。神話は聖なる話である。その聖なるものが消えて、俗なる話になったのが説話であろうとしてみたのである。文学史の展開に具体的にあてはめる場合、この方が説明し易いと思ったからである。拙著「日本霊異記の研究」(正・続)では、一貫してこの方法によっている。

何れにしても、霊異記は、神話と説話との関係を考えるにあたって、有力な手掛りになる作品なのである。従来の文学史では、霊異記は、古代に入れられるにしても、中世に入れられるにしても、ごく僅かしか触れられていない。付け足しである。しかし、文学史的な立場から、口承文学の流れを辿る場合、霊異記は、古代と中世との空白を埋め、両者を結ぶ架橋になる作品なのだから、もっと重視されるべきものであろう。内容的にも多くの問題が含まれている。若い方々の研究を待望するものである。

ただ、霊異記は、今述べたように、古代と中世との両方を持っているのだから、研究者としては、古代と中世との両方に目のとどく人が望ましい。私の場合でいえば、たまたま記紀神話を専攻していたために、霊異記の古代的側面がみえたのだが、説話についての知識に欠けているために、中世的側面はみていないのである。片面だけみているという訳である。霊異記を研究する場合、古代と中世との両方に目のとどく人が望ましいにしても、現実にはなかなかむつかしいとすれば、これからは、古代と中世との研究者が、それぞれの専攻を生かして、協同して研究することが必要なのではないだろうか。私の仕事への自己批判から、そのようなことを思うのである。